

産地, 今(4)

リ レ 一 随 筆

兵庫県のタマネギ,
キャベツの産地だより(兵庫県立中央農業技術センター普及指導室
二井清友)三原郡三原町におけるタマネギの調査 (兵庫県病害虫
防除所 西口真嗣氏原図)The Introduction of Onion and Cabbage-Producing District in Hyogo. By Kiyotomo FUTAI
(キーワード: 兵庫県, タマネギ, キャベツ)

はじめに

兵庫県は日本列島のほぼ中央に位置し、南は瀬戸内から北は日本海に至る広大な県土を有している。中央部を東西に走る中国山地を境に、北部(但馬、丹波)は日本海側気候に属し、日照時間は少なく、降水(雪)量は多い。一方、南部(阪神、播磨、淡路)は瀬戸内気候で、降水量は少なく、冬期も比較的温暖である。こうした自然条件のもとで多彩な農業が展開されている。

北部の但馬、丹波地域では水稻を中心に高冷地条件を利用した野菜栽培や地域に応じた特産物栽培が、南部の阪神、播磨地域では野菜、花き、果樹など地域環境に適応した都市農業や都市近郊農業が、淡路地域は温暖な気候に恵まれ、野菜や施設花きなど生産性の高い農業が行われている。ここでは県内で栽培面積の多いタマネギとキャベツについてその概要を紹介したい。

I タマネギ

兵庫県の農業、特に野菜栽培の中心は淡路島で、露地野菜栽培面積は県全体の約70%を占める3,600 haである(1999年、以下統計数値は同じ)。兵庫県のたまねぎ栽培は淡路島において1880年代後期から栽培が始まり、その後淡路南部地域を中心に集団栽培が広まり、66年には国の指定産地に指定された。現在の栽培面積は淡路島だけで約2,000 haで、これは県全体の露地野菜栽培面積の約38%を占める。温暖な気候のため古くから各種病害が発生し、対策に苦慮してきたが、その取り組みは模範的なものでありそのまま

他の地域にも応用されるなど、機械化などの技術も含めて最も先進的な農業地域である。ここでは特に病害の発生の変遷について紹介する。

1 ベと病

1950年に初めて三原郡で発生が認められ、その後発生地域は拡大し、56年には大発生して大きな被害をもたらした。これに対して県や各関係機関では総合防除計画を策定し、防除実施組織を確立して防除計画に基づいた共同防除体系を推進した。防除方法としては薬剤の適期散布が中心であったが、それ以外にも越年罹病株の除去の徹底などを実施した。野菜病害虫に対してこのような集団防除が実施されたのはこれが最初であったが、この地域では1950年代前半に行われたイネのサンカメイチュウの集団防除以来確立されている防除組織が役に立った。薬剤はジネブ剤、シクロヘキシミド剤などが使用され、1960年代前半には発生は漸次減少した。これ以降、淡路地域では防除体制が確立され、その後発生する多くの病害虫にも集団で迅速な対応ができるようになった。

2 ボトリチス属菌による葉枯れ症

1962年以降ベと病の発生は減少したが、それに替わりボトリチス属菌による葉枯れ性病害の発生が増加した。各関係機関で防除薬剤を検討した結果、トリアジン剤、チアジアジン剤、ダイホルタン剤、マンゼブ剤等の効果が高いことが確認され、現場で用いられた。ボトリチス属菌による発病は初期には葉枯れ症状が主であったが、1970年代後半になると後に述べる灰色腐敗病とともにボトリチス属菌による株腐症も発生した。その後はTPN剤を中心とする防除体系により発生は抑制されている。